

インターネット公開許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。

## 大乘戒壇独立運動の目的について

白 馬 泰 宣

大乘戒壇の独立運動は伝教大師最澄による日本仏教史上劃期的な仏教革新運動である。これは又円戒確立運動とも云われている。それは比叡山に南都僧綱の支配より独立した大乘戒壇を設立して、こゝに於いて円頓戒を授戒することによつて菩薩僧を養成し、以つて日本国民を指導教化せしめ、仏法を興隆し、国家を無窮に鎮護せしめんとしたのが大乘戒壇独立運動である。その経過を述べると、弘仁九年暮春、円機淳熟観のもとに純大乘の戒法を樹立せんとして、自ら小乗戒を棄捨し、同年五月、戒壇を独立し以つて菩薩僧を養成する制度の大綱を規した六条式を嵯峨天皇に上奏し、続いて八月には細目を記した八条式、翌十年三月には小乗と大乘の戒法の差異を明確にした四条式を奉進して、戒壇独立の勅許を請願した。これに対して南都の諸大寺及び僧綱が猛烈に反対し

た爲、容易に勅認されず、十一年には顯戒論、仏法血脈譜、十二年には顯戒論縁起等を上進して大乘戒を頓揚し戒壇の独立に意を尽したのであるが、宿願を達成せぬまま十三年六月入寂した。しかし師の初七日にして勅許が降下せられ、翌十四年四月、二祖義真を戒師として円頓菩薩戒の授戒会が行われ、師の大願は遂に成就された。こゝに於いて天台法華宗は日本仏教の源流として後世に法灯を輝やかす基礎が確立されたのである。これが運動の経過の大略である。

始めに記した如く、大師の仏教革新運動の最終の目的は住持仏法鎮護国家にあるのであるが、これについて詳述しよう。

かくの如き広大な目的を達成する方法として、師は円戒の確立、戒壇の独立を以つてした。師は聖徳太子に帰依すること深く、之を師と仰いでいるが、太子の法華經義疏の製作による法華經の弘通により、又鑑真並びにその門下による法華經の流布、あるいは大師自身の教化伝導によつて、日本国民の機類が転変して小乗の機はなく、すべて大乘の機根となつたと云い、いわゆる円機淳熟觀

にたつて従来の南都小乗仏教の外に、純大乘の教法を弘通し、円頓菩薩の大戒を確立して鎮護国家の新仏教を樹立せんとしたのである。これが円戒確立運動である。その鎮護国家の方法は如何にというと請立大乘戒表に

誠須兩業出家永廻小乘儀固為大乘儀依法華制不交小律儀每年春三月先帝国忌日於比叡山寺与清淨出家為菩薩沙彌授菩薩大戒亦為菩薩僧即便令住山修学一十二年為国家衛護福利 生国宝国利具如宗式等云云

と記せる如く、法華經の制に依つて純大乘の円頓戒を授けて菩薩僧を養成し、国家を衛護し、衆生を利益せんとするものである。これを具体的に規定したものが六条式即ち天台法華宗年分学生式である。

こゝにいう先帝とは延暦二十五年三月崩御した桓武天皇のことである。帝は奈良朝末期の腐敗した政治、仏教界を革新せんため延暦三年平安遷都を断行して人心の一新を計つた。そして南都の仏教の統制を嚴重にすると共に最澄、空海等の新仏教に大いなる保護を加え、その流布を計つた。師の住持仏法鎮護国家は帝の精神に於いて

も見られるところであつたからである。

戒壇独立運動は僧綱の支配より離れた山林清浄なる法華一乗宗の完全なる独立を計らんとしたものである。當時の仏教界は治部省の玄蕃寮に於いて統轄され、而して玄蕃寮の監督下に僧綱なるものがあつて、法務上のことは一切こゝに於いて処理されることになつていた。即ち僧尼を監督し、諸大寺を管理するもので、その職は南都諸大寺の独占するところでその權威は絶大であつた。得度の制度、受戒の制度も全てこゝに於いて行われ、比丘たらん者は南都の東大寺、下野の薬師寺、築紫の観音寺にて登壇受戒しなければならなかつた。而してその戒法は鑑真所伝の二百五十等の具足戒であつた。南都仏教はこのような僧綱の絶大な権力の下で安穩をむさぼり、又権力争奪の闘争が繰り広げられ、仏教の真精神は失われて腐敗墮落の途上にあつた。大師はこのような疲弊した南都に於いては到底護国の教法、國民の指導者の出現は望み得べくもないと感知し、南都と絶縁し、僧綱の支配より離脱して、清新な山林仏教を興隆して国家を利益せんと考えたのである。かくて僧綱の支配より独立して得

度授戒を行い、菩薩の大僧を養成する規則を制定したのが学生式三式であり、かくの如き新制度を樹立せんとしたのが戒壇独立運動である。

以上述べたところより、大乘戒壇の独立を以つて円戒の確立を計り、而して国家を鎮護せんとするのが師の仏教革新運動であるということが出来る。換言すれば鎮護國家の要道は円頓菩薩の大戒を以つて國家道德と為すべきであり、その為には大乘戒壇の独立が必須の条件であつたのである。

## 北陸に於ける真宗教団の發展と一向一揆

— 加賀を中心として —

宝 喜 哲 夫

浄土宗開祖、法然上人の一門弟であつた、親鸞聖人が、旧仏教宗派からの弾圧を受けて越後の国府へ流罪に処せられ、建永二年であつた。四年後に流罪は解かれたが、京都に於ては、未だ、専修念仏の停止が行なわれていた